

衣服素材を異にする基準の皮膚温に対する影響
 大阪女子学園短大 ○川上公代 増田依子

目的 男性の夏の家庭着として、素材を異にする基準が数多く市販されている。今回は試料として綿100%、ポリエステル100%、綿とポリエステルの混紡、ポリエステル・レーヨン・麻の混紡の4種類の素材で、デザイン、サイズの違いを基準を作成し、それぞれの基準が、身体各部の皮膚温および平均皮膚温等に及ぼす影響について検討した。

方法 被検者は比較的体格の近似した健康な女子学生で、測定室の温湿度は、 $25 \pm 1^{\circ}\text{C}$ 、 $65 \pm 5\%$ であり、無風の環境で実験を行なった。多点式サーミスターを使用し、皮膚温(前額、胸、前腕、手背、大腿、下腿、足背)、および衣服表面温(胸、大腿)を測定した。平均皮膚温の算出は、体表面積比の重みづけを行なって求めた。口腔温、腋窩温も同時に測定した。

結果 4種類の試料、いずれを着用した場合も、身体各部位の皮膚温は、胸がもっとも高く、前額、手背、大腿、前腕、足背、下腿の順に低くなった。平均皮膚温は、ポリエステル・レーヨン・麻の混紡の順に高くなり、綿、ポリエステル、綿とポリエステルの混紡の順に低くなった。差の検定の結果、ポリエステル・レーヨン・麻の混紡の試料と、綿・ポリエステル混紡の試料との間に有意差が認められた。被検者は実験中、着心地の悪さを訴えていた。(ポリエステル・レーヨン・麻混に対して)これは被検者の主観的判断に、生理的根拠を与えているものと思われる。各部位別にみると、前額、胸、前腕において、綿・ポリエステル混紡の試料がもっとも低く、上記同様、ポリエステル・レーヨン・麻混との間に有意差が認められた。